

山陰地方における 弥生時代前期の墓地構造

墓制からみた縄文／弥生の様相

Cemeterial Structures of the Early Yayoi Period in Sanin Region :
Jomon and Yayoi Cultures from the Viewpoint of Burial Systems

山田康弘

YAMADA Yasuhiro

はじめに

- ① 鳥根県松江市堀部第1遺跡における墓地構造
- ② 山口県下関市土井ヶ浜遺跡西地区の分析
- ③ 鳥根県松江市古浦遺跡における墓地構造
- ④ 鳥根県美郷町沖丈遺跡における墓群構造
- ⑤ 墓制からみた山陰地方における「弥生化」の実態

おわりに

【論文要旨】

これまで、山陰地方における縄文時代から弥生時代への移行は、比較的スムーズではあったものの、その一方でダイナミックなものであると想定されてきた [山田 2009:178-179]。しかしながら、弥生時代前期の墓地遺跡における墓群構造を細かく検討してみると、一見渡来的な状況を呈しながらも、実は在来（縄文）的な要素が複雑な形で内在していることが明らかとなった。例えば、堀部第1遺跡の墓地は列状配置構造という縄文時代の墓制にはみることができなかった渡来的な構造を採りつつも、墓地内には埋葬群が存在し、各埋葬群は小家族単位で占取・受益されるという在来的要素を残している。また、古浦遺跡における墓地の状況は、沿岸部に位置し渡来系弥生人骨を出土するにもかかわらず塊状配置構造を呈し、年齢・性別による区分が存在するという縄文時代の墓制を踏襲した在来的な要素を備えている。同時期にしかも至近距離に存在する堀部第1遺跡と古浦遺跡の二遺跡を比較するだけでも、その墓地構造には大きな差が存在しており、当時の状況の複雑さが理解できる。その一方で、山間部に位置する沖丈遺跡の墓地は塊状配置構造を呈しており、一見縄文時代以来の墓制の延長上に営まれていたように思われるが、不可視属性である下部構造には木棺が用いられ、管玉が墓内部より出土する事例があるなど、渡来的な要素も併せ持っていたことも明らかとなった。これらの点を踏まえて本稿では、山陰地方における弥生化のプロセスに対して補正を行い、長期的にはスムーズかつダイナミックな状況を呈するものの、個々の遺跡における墓地においては一時的に在来的・渡来的両方の要素が混在し、その状況は在地の縄文人と渡来文化を携えて移動してきた人々との接触のあり方を表していることを指摘した。

【キーワード】 弥生時代前期、渡来系弥生人、墓、列状配置構造、塊状配置構造

はじめに

以前、筆者は鳥根県松江市堀部第1遺跡をはじめとする山陰地方における弥生時代前期の墓地の分析を行い、当地の墓地構造が列状配置構造をとるもの〔原山類型〕と塊状配置構造をとるもの〔沖丈類型〕とに分類することができ、列状配置構造を呈する墓地が縄文時代の墓制にはみることのできない渡来的なもので、いわゆる渡来系弥生人の埋葬地であり、これが日本海沿岸部に点々と残されている状況は、渡来系弥生人が拡散していく様を表したものと論じたことがある〔山田2000〕。また、あわせて塊状配置構造をとる墓地に対して、在来の「縄文的」要素が残存するものとの見解も提出した。その後2005年になって、堀部第1遺跡および鳥根県松江市古浦遺跡の報告書が刊行され〔赤澤編2005、藤田・赤澤編2005〕、筆者も古浦遺跡の分析を行うなどし〔山田2008a〕、当地における墓地構造の概要を見通すことが可能となった。加えて、山陰地方山間部に位置し、弥生時代前期の配石墓群が確認された鳥根県美郷町沖丈遺跡の報告書も刊行され〔牧田編2001〕、山陰地方海岸部と山間部の対比を行うことも可能となった。

それらを踏まえて本稿では、弥生時代前期の墓地遺跡である堀部第1遺跡および土井ヶ浜遺跡、古浦遺跡を検討するとともに、対比資料として山間部に所在する沖丈遺跡の事例を取り上げつつ、その墓地構造の分析を通じて、山陰地方における弥生時代前期の状況について再度考察を試みることにしたい。なお、当該地方における「弥生化」のあり方についてはすでに山田2009にて論じており、現在でも大きな変更は必要ないと考えているが、本稿はその枠組みに対して若干の補正を加えるものである。以下、各遺跡の事例を検討しつつ、山陰地方における「弥生化」の問題について再度考察してみよう。

①……………鳥根県松江市堀部第1遺跡における墓地構造

(1) 墓地の全体構造

堀部第1遺跡は、鳥根県松江市鹿島町大字南講武に所在する弥生時代前期を中心とする墓地遺跡である。1998年から翌年にかけて鹿島町教育委員会によって発掘調査が行われ、下部構造として木棺を有する配石墓が60基ほど検出されている。調査途中で遺跡の一部保存が決定したため、調査区のうち北東部分については完掘されていない。

図1はこれらの配石墓群の位置関係である。中央にある「長者の墓」とされる箇所は独立丘で、その頂部は残念ながらすでに削平されてしまっており、ここから古墳などの墓や何らかの遺構が検出されているわけではない。しかしながら、配石墓群はこの「長者の墓」をとりまくように、環状に、また全体的にみれば列状に配置されている。報告者の赤澤秀則によれば、これらの配石墓群の頭位方向は「長者の墓」に沿った形で、ほぼ反時計回り、方位でいうと東側から北側に統一されているという〔赤澤編2005:172〕。

遺跡の場所自体は周囲が山に囲まれてはいるものの、比較的開けた谷平野に立地しているため、

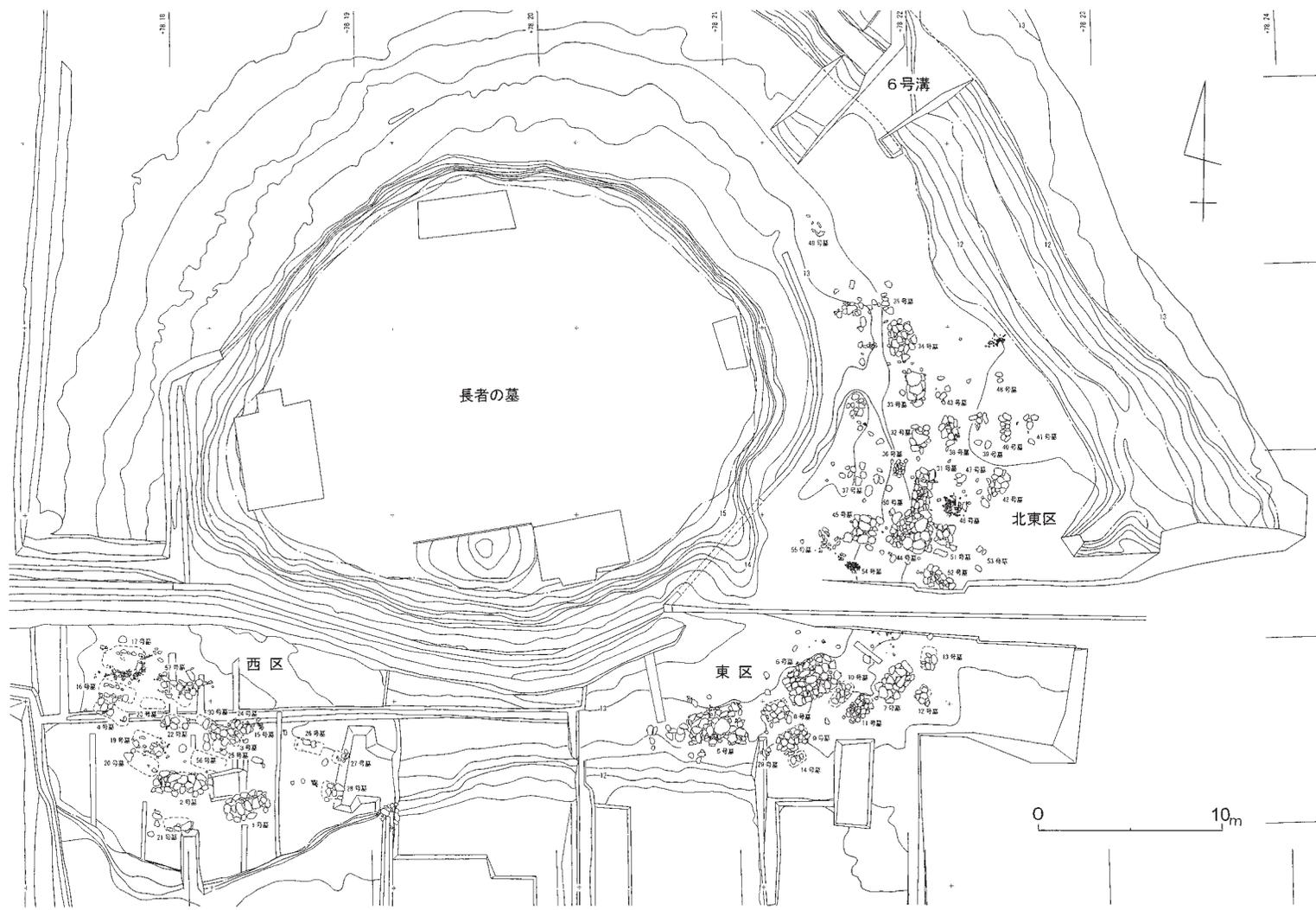


図1 堀部第1遺跡における配石墓の位置関係 [赤澤編 2005] より

このような独立丘は視覚的にもかなり目立つものであったろう。堀部第1遺跡の配石墓群は、「長者の墓」を目印として、非常に目に付きやすい場所に設けられていたことになる。その場合、「長者の墓」は、墓地内に存在するモニュメントであったと考えることができ、これらの配石墓群はいわゆるモニュメント・セメタリーをなしていたものと捉えることができよう。縄文時代の事例においても推定されるように、このような視覚的モニュメントが集団統合の象徴的存在となっていた可能性は高く〔山田1995〕、「長者の墓」の頂部に何らかの構築物が存在していたのではないかと想定される。

これらの配石墓群は、調査者によって西区・東区・北東区に区分されている。西区と東区の間には墓の分布上の空白箇所が存在し、それぞれが単独で墓群を形成していることは明らかである。また、東区と北東区の間には未掘箇所があるため、図1の見かけ上は東区と北東区が一連の埋葬区のようにみることもできるが、報告者の赤澤秀則によれば、この未掘箇所を検土杖で探査したところ、上部配石と思われる遺構を確認することができなかったとされている〔赤澤編2005:58〕。本稿でも赤澤の所見に従い、東区と北東区を別の墓群として理解しておきたい。すなわち、堀部第一遺跡における墓地構造は、「長者の墓」を中心として全体的に環状および列状配置構造をとりながらも、その内部はいくつかの分節構造を内包しているということになる。この分節構造は、そのあり方からみて、筆者が言うところの埋葬群に比定できるものであろう〔山田2008b:75〕。

(2) 西区における墓群構造

これらの埋葬群のうち、西区は堀部第1遺跡において最初に発見された墓群であり、1・2・3・4・15・16・17・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・30・56・57の20基から構成されている(図2・表1)。これらの配石墓群の時期について考えてみると、堀部第1遺跡の各配石墓に伴う土器には、口縁部下に段を有するものが多く(図3)、基本的には出雲編年のI-2期を中心とするものと考えることができよう〔松本1992:419-423〕。また、中には20号墓に伴出した壺形土器のように段が消失し沈線化しており、I-3期に入るものも存在する。しかし、その時間幅はさほど広くはない。堀部第1遺跡西区は、基本的にI-2期を中心に造営された墓群と捉えておきたい。

図1・2を見てもわかるように、西区の墓群はその長軸方向を東から西方向にそろえる列状配置を採っている。なお、報告者の赤澤秀則によれば、西区の墓群は単なる列状配置ではなく、その内部において墓が2基並列し、2基一対となる傾向があるとされている〔赤澤編2005:22〕。確かに、赤澤が指摘するように4号墓と16号墓、19号墓と20号墓、3号墓と56号墓、そして27号墓と28号墓は位置的にも隣り合い、あたかも2基一対であるかのような位置関係を呈している。しかしこの他にも、位置的には両者は並列しないものの、1号墓と2号墓についても上部配石のあり方や、その規模からみて2基で一対になるとみてよいだろう。また、この1号墓と2号墓は西区においては規模的に突出しており、このことから考えて、西区という墓群内に規模的に大きな墓が一組存在し、それ以外の中小型墓が位置的に2基一対となる組み合わせがあり、これが列状に配置されるとみることができよう。

また、赤澤秀則は木棺の内法の検討を行い、その長軸方向の内法が1.2m×0.4m以下のものを基本的には子供の埋葬例であると考えている〔赤澤編2005:172〕。図4は、赤澤が示した木棺墓の

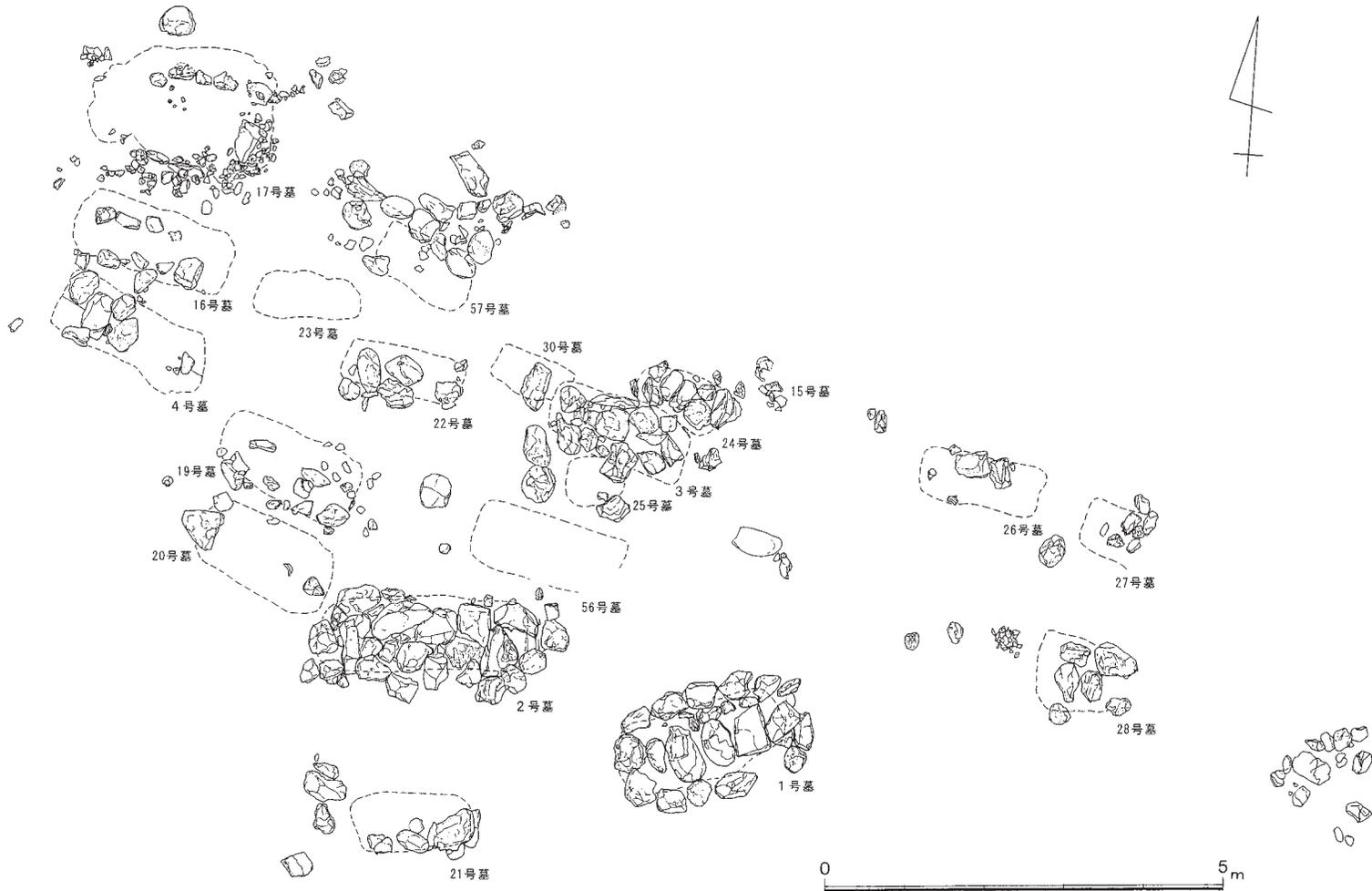


図2 堀部第1遺跡西区における配石墓の検出状況 [赤澤編 2005]より

表1 堀部第1遺跡西区における墓一覧

墓番号	上部構造	上部構造の規模(m)	下部構造	下部構造の規模(m)	副葬品等	想定される年齢段階	備考
1	配石	2.5 × 1.5	木棺	1.5 × 0.5	土器1	大人	2号墓とペア?
2	配石	3.3 × 1.2	木棺	2.3 × 0.6	土器1・石鎌14・管玉4	大人	1号墓とペア?
3	配石	1.8 × 0.8	木棺	1.6 × 0.5	土器1・石鎌1	大人	56号墓とペア?
4	配石	1.7 × 0.9	木棺	1.3 × 0.45	土器1・石鎌1・エゴノキの実	大人	16号墓とペア?
15			土器棺			子供	
16	配石	1.5 × 1.0	木棺	1.55 × 0.45	土器2・玉髓1・泥岩1	大人(青~壮年期)	人骨から推定4号墓とペア?
17	配石	1.5 × 1.3	木棺	1.1 × 0.4	土器2	子供	
19	配石	1.7 × 0.6	木棺	1.3 × 0.5	土器1	大人	20号墓とペア?
20	配石	不明	木棺	1.5 × 0.5	土器2	大人	19号墓とペア?
21	配石	2.5 × 1.2	木棺	1.1 × 0.35	土器1・竪櫛1	子供	
22	配石	1.5 × 0.6	木棺	1.1 × 0.35	石鎌1	子供	
23			木棺	0.8 × 0.35	石錘1・石器1	子供	
24	配石	1.3 × 0.8	木棺	0.8 × 0.4		子供	
25			土壇	0.7 × 0.6		子供	
26	配石	0.7 × 0.4	土壇	1.5 × 0.6	土器2	大人	
27	配石	不明 × 0.7	木棺	不明 × 0.35	土器1・石鎌1	大人	試掘により一部破壊される
28	配石	不明 × 0.9	木棺	不明 × 0.4	土器2・石鎌1	大人	出土人骨から大人と想定
30			木棺	0.7 × 0.25	石鎌1	子供	
56			木棺	1.5 × 0.6	土器1・竪櫛1	大人	3号墓とペア?
57			木棺	0.9 × 0.4	土器1・石鎌1	子供	

内法の規模である。これを見ると確かに1.2 m × 0.4 m以下のものと、それ以上の規模をもつものの中には差があると思われる。また、西区28号墓に残存した人骨下肢の出土状況からみて、各遺体の埋葬姿勢は膝をゆるく曲げた、筆者の分類のc1～c3の間にあったものと想定でき、上述した見解は、縄文時代の土壇の規模と年齢段階を検討した筆者の研究成果と照らし合わせても、小児期以下の事例を子供とするならば、矛盾は無い[山田1999]。したがって、赤澤の言うとおりの1.2 m × 0.4 m以下の事例を子供の事例(小児期以下)としてみても、基本的には問題は生じないと思われる。

その点を踏まえて、もう一度図2と表1を見てみよう。先の検討から子供の埋葬例だと考えることのできる事例は、17・23・57・22・30・24・25・21号墓である。これを見ると、子供の埋葬例は基本的に「長者の墓」側に集中して存在し、その外側を2基一対となった大人の埋葬例が緩やかなカーブを描きながら配置されていることがわかる。また、2基一対となった4・16号墓には、それに並列して17号墓が、19・20号墓にはやや形を乱しながらも22・23・57号墓が並置されていることもわかる。さらに3・56号墓の組み合わせでは、3号墓と切りあうかのように24・25・30号墓が位置し、そしてやや離れて15号墓の土器棺墓が存在する。1・2号墓の組合せにも近接してほぼ同じ軸方向を持つ21号墓が存在する。このように各墓のあり方を捉えていくと、列状配置をしている西区の埋葬群内には2基一対の大人の墓とそれに伴う子供の墓という、さらなる分節構造が存在したと考えることができるだろう。このような列状配置墓群内における重層的な分節構造のあり方は、縄文時代の墓制にもみることのできる埋葬群と埋葬小群という構造と対比することが可能である[山田2008b:75]。この場合、各埋葬小群は、二人の大人と最低でも一人、通常複数の子

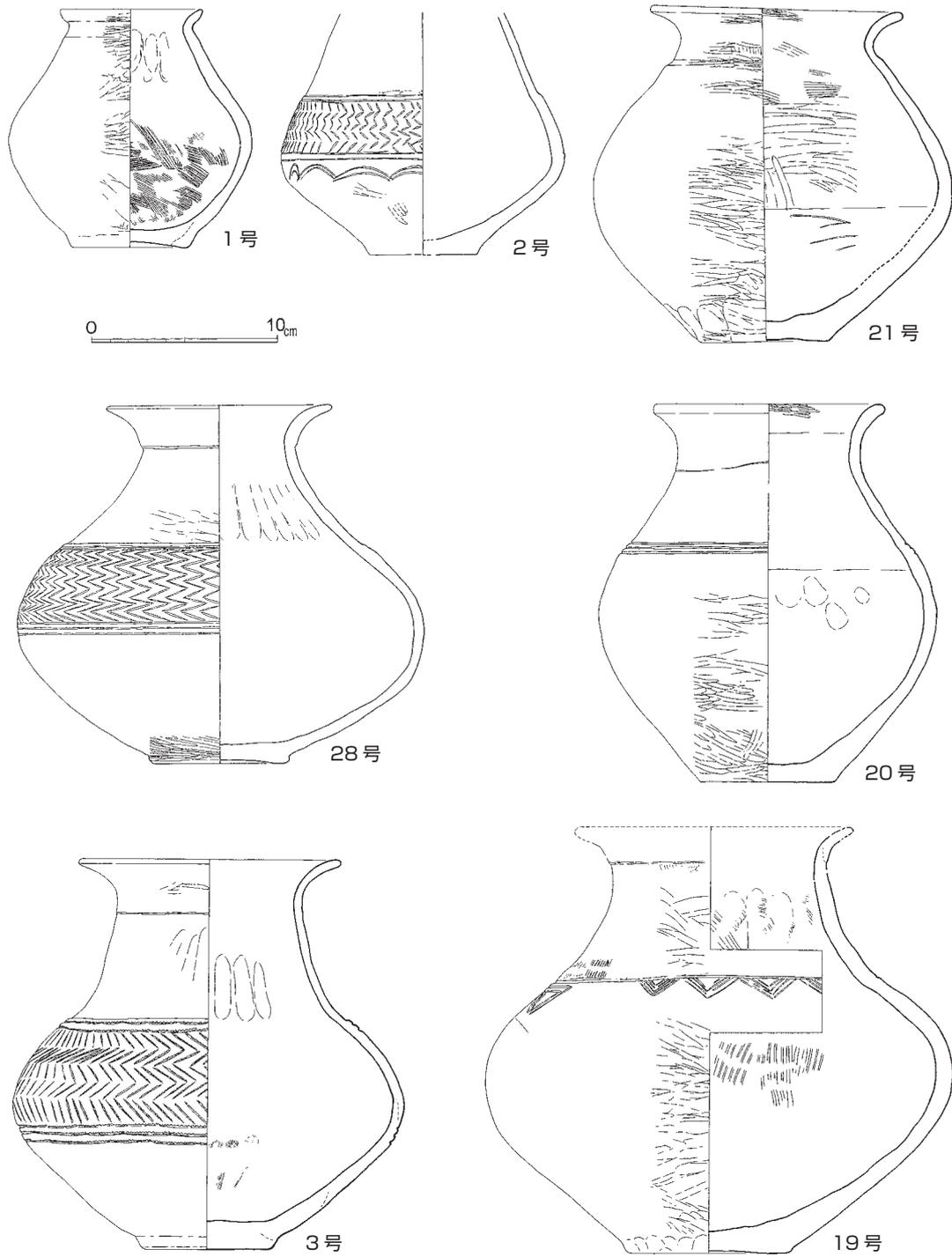


図3 堀部第1遺跡西区配石墓出土土器 [赤澤編 2005] を改変

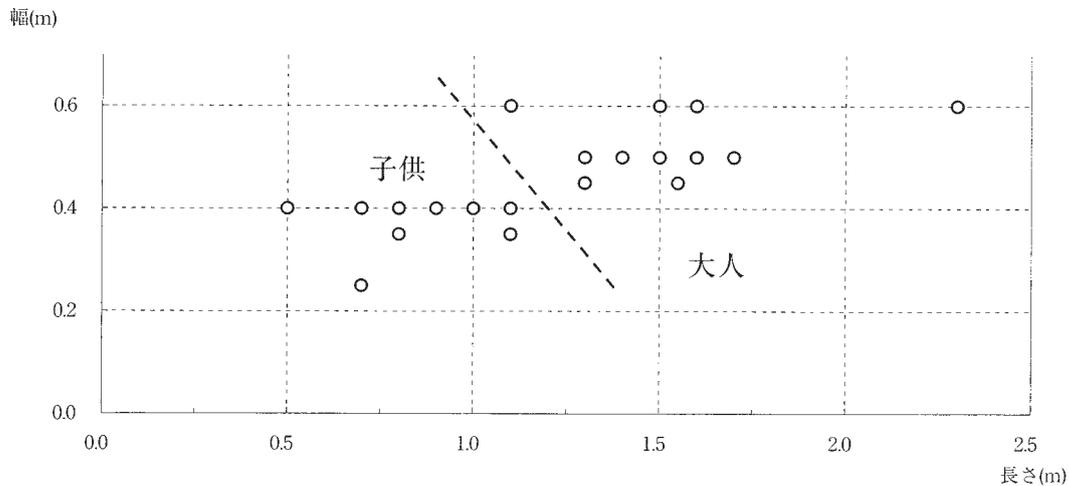


図4 堀部第1遺跡における木棺の内法 [赤澤編 2005]より

供から構成される人間集団を含むことになる。問題はその人間集団とは一体何かということである。その内容については後述することとして、ここでは堀部第1遺跡の西区埋葬群が上記のような構造を持っていることをまずは確認しておきたい。

(3) 東区における墓群構造

東区は、5号墓から14号墓までの10基から構成されている(図5・表2)。各墓から出土した土器群の内容は西区と同様であり、I-2期を主体とする墓群であると考えられる。この区においても、その規模からみて2基一対の構造をとると思われる事例が存在する。それは5号墓と6号墓である。5号墓は堀部第1遺跡最大といってもよいほどの上部配石を有し、その規模は 3.2×2.4 m、高さは1 mを超えるものと復元されている。この配石にともなって土笛も出土している。墓に伴った事例としては初めてのものであり、土笛の用途に墓制にかかわるものがあつたと推定される。また、木棺内におけるコメの副葬が確認されており、これも前期のものとしては稀有の事例である。木棺の内部には、ぼろぼろになりながらも遺存した人骨が出土しており、その頭部付近からは石鎌が出土している。石鎌の出土状況からは即断できないが、頭部に打ち込まれたものである可能性もある。6号墓も5号墓にこそ及ばないが、その規模は 3.1×2.1 mもあり、東区内においては他の墓を圧倒している。また、構造自体も下部構造を上部配石の北側に寄せ、南側に一定のスペースを設けるなど、5号墓と6号墓には共通する部分が多く、この両者がペアになることを示唆している。また、5号墓からは朝鮮半島に起源をもつ松菊里式土器に類似した松菊里系土器が出土している。これら5・6号墓に沿う形で、7~14号墓および29号墓が配置されている。中でも8号墓と9号墓、および10号墓と11号墓などは、位置的にも2基一対という配置に置かれており、西区において抽出できた、2基一対の大型配石墓+2基一対の中小型の配石墓+その他という群構造は東区においても確認できる。



図5 堀部第1遺跡東区における配石墓の検出状況 [赤澤編 2005]より

表2 堀部第1遺跡東区における墓一覧

墓番号	上部構造	上部構造の規模(m)	下部構造	下部構造の規模(m)	副葬品等	想定される年齢段階	備考
5	配石	3.2 × 2.4	木棺	1.6 × 0.6	土器4, 土笛1, コメ, 石鏃1	大人	高さ1m以上の配石 松菊里系土器?
6	配石	3.1 × 2.1	木棺	1.6 × 0.5	土器3	大人	5号墓とペア?
7	配石	2.4 × 1.4	木棺	1.7 × 0.5	土器2	大人	
8	配石	1.4 × 1.0	木棺	1.1 × 0.6	土器?	子供	
9	配石	1.9 × 0.9	木棺	1.3 × 0.5		大人	
10	配石	1.4 × 0.8	木棺	1.4 × 0.5		大人	
11	配石	1.6 × 1.0	木棺	1.3 × 0.5	土器1	大人	
12	配石	0.8 × 0.8	木棺	0.5 × 0.4		子供	
13	配石	1.2 × 0.8	木棺	1.0 × 0.4	土器?	子供	
14	配石	0.8 × 0.5	木棺	0.7 × 0.4	土器1	子供(小児期)	9号墓に寄り添う?

(4) 北東区における墓群構造

これら西区・東区に対して北東区の群構造はやや複雑である。図6は北東区の配石墓の配置図である。これをみると、北側に位置する33号墓と34号墓は規模的にも2基一対となりそうである。これに対し、その南側に位置する32・38・39・40・41号墓の5基は長軸方向を揃えて東西に展開している。さらにその南側では配石墓が、上部配石を斬り合うかたちで密集している。しかしながら大型の礫を中央部に複数配置するという構造からみて、44号墓と45号墓はペアをなし、また、50号墓と31号墓は両者ともに44号墓に上部配石が切られる一方で、両者の規模が類似する点からみて、これもペアを形成すると思われる。したがって、北東区においても2基一対の構造は存在しているとみてよいであろう。その場合、上部配石の規模からみて子供の埋葬例と想定される36・37・46・47号墓などは、31・50号墓のペアに付随するものと考えることができよう。同様に53・54・55号墓などは44・45号墓のペアに付随すると思われる。これらの点からみて、北東区においても、西区や東区において確認された群構造は踏襲されていると判断できよう。ただし、出土した土器をみると32・34・50・55号墓出土土器のように肩部に段をもったり、有軸羽状文を有したりする事例も存在し、若干他の区に比較して時期的に早い段階から墓群の形成が行われていた可能性がある。

以上、堀部第1遺跡における各埋葬群の分析を試みた。基本的には、各埋葬群中に2基一対のペア+その他の墓という構造が内在するという点を読み取ることができた。実は、このような墓地構造は、山口県の土井ヶ浜遺跡においても確認でき、山陰地方海岸部に展開する列状配置構造をもつ墓地の基本構造であった可能性がある。以下、その事例を確認しておくことにしたい。

②……………山口県下関市土井ヶ浜遺跡西地区の分析

(1) 墓地の全体構造

土井ヶ浜遺跡は山口県下関市豊北町神田に所在し、土井ヶ浜海岸に直交するように突き出た砂洲



図6 堀部第1遺跡北東区における配石墓の検出状況 [赤澤編 2005]より

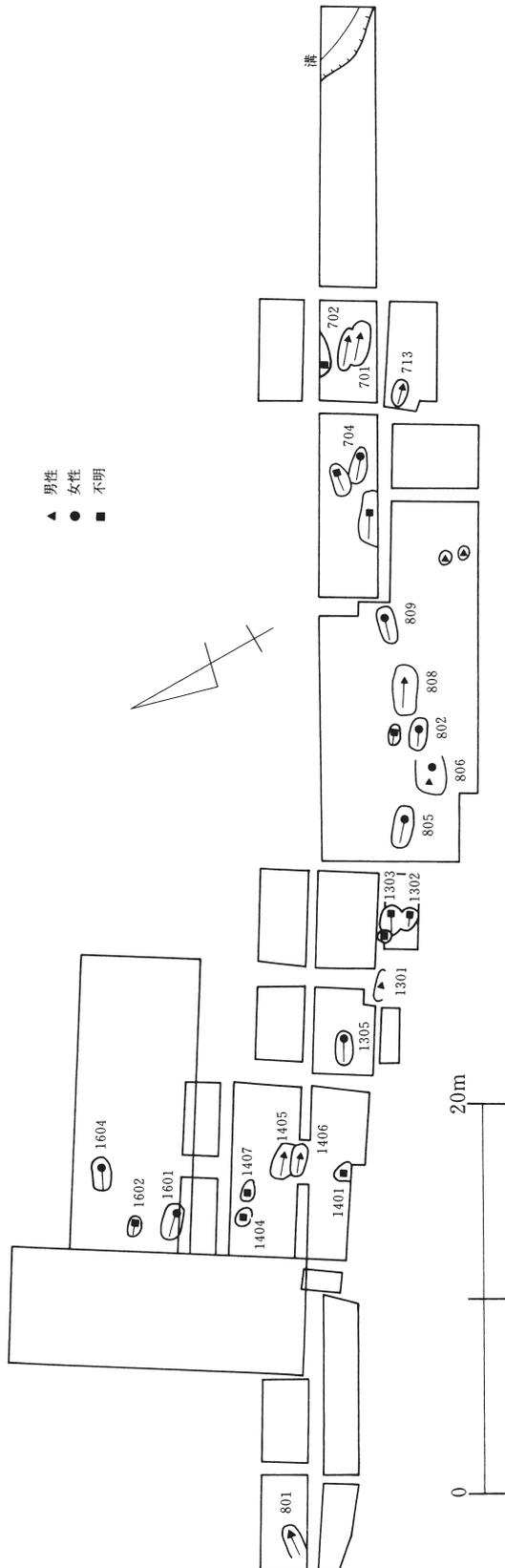


図7 土井ヶ浜遺跡西地区における人骨出土位置〔山田編1997〕より

上に立地する。1953年以降に19回にもわたる発掘調査が行われ、これまでに300体にもものぼる弥生時代の人骨が出土している。これらの人骨のほとんどが頭位を東南に向けているが、これは海岸に対して直交する形で発達した砂洲上に遺跡が立地していることに加え、列状配置を志向していたためと推察される。また、北部九州を中心として、頭位方向を一定の方向に揃える墓地は数多く確認されており、その意味では土井ヶ浜遺跡における頭位方向の斉一性に対して、少なくとも一般に流布されているような「顔が西を向き、故郷を偲ぶ」という解釈をあえて採用する必要はない。

墓地の構造は、遺跡の中央部を走る溝を境として、大きく東地区と西地区に分けることができ、東地区では抜歯系統によって埋葬地点が区別されていることが判明している〔山田1997〕。また、7次調査以降の事例については、遺体を埋葬していた土壌のプランや上部構造が確認されているものも存在する。今回検討対象とするのは西地区であり、発掘回数でいうと7・8次・13～16次調査区がこれにあたる(図7・表3)。

(2) 西地区における墓群構造

図7は、土井ヶ浜遺跡16次調査までにおける人骨の出土位置である。これをみると、土井ヶ浜遺跡西区の墓地は典型的な列状配置構造をなすものと捉えることができる〔山田編1998〕。また、7次調査出土の700番台の人骨群と、8次調査出土の800番台の人骨

表3 土井ヶ浜遺跡西地区出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	伴出遺物	抜歯の有無	抜歯系列	備考
701	男性	壮年		上顎左右側切歯犬歯・下顎左右第2小臼歯	C (IC)	
702	男性	熟年		不明	不明	
704	女性	壮年		あるが未公表	不明	
713	男性	壮年		あるが未公表	不明	
801	男性	壮年		不明	不明	
802	女性	成人		不明	不明	
805	女性	熟年		上顎左犬歯	C	
806A	女性	壮年		不明	不明	806ABは合葬
806B	男性	熟年		不明	不明	806ABは合葬
807	不明	幼児				
808	男性	熟年		上顎左右側切歯	I	
809	女性	熟年		上顎左右側切歯	I	
1・2号集骨	男性	熟年		不明	不明	
1301	男性	不明		不明	不明	
1302	不明	幼児	土器			
1303	不明	幼児	土器			
1304	不明	幼児				
1305	女性	壮年	貝輪	なし	O	
1401	不明	小児				
1404	不明	乳児				
1405	男性	熟年		上下顎左右側切歯	I	
1406	男性	熟年		上顎左右犬歯	C	
1407	不明	乳児				
1601	女性	熟年	土器	下顎左右第1切歯?	?	
1602	不明	幼児				
1604	女性	壮年	バカガイ 貝殻	上顎左右犬歯	C	

群の間、および13次調査出土の1300番台の人骨群と14次調査出土の1400番台の人骨群の間に、若干の空白地帯が存在することがわかるだろう。このことは、列状配置内に何らかの分節構造が存在することを示唆する。仮にこれらをA群(701・702・704・713号人骨)、B群(805～809・1301～1305号)、C群(1401・1404～1407号)、D群(801号)と呼ぶことにしよう。おそらくこれらは規模的にみて埋葬群に相当するものであろう。A群は大人の男性3(701・702・713号)に対し女性が1(704号)という構成であるが、実は7次調査時に土壌の上面だけ確認したものの発掘を実施しなかったとされる事例が少なくとも7例存在することから〔乗安編1982:7〕、遺体数自体はもう少し多くなると思われる⁽²⁾。また、B群は大人の男性3(808・806B・1301号)、女性4(805・806A・809・1305号)、子供が4例である。C群は大人の男性2(1405・1406号)、子供3(1401・1404・1407号)であるが、南西側に未掘地点があり、全体の広がりを捉えることはできない。D群については、不明と言わざるをえない。一つの埋葬群をほぼ完掘したと思われるB群においては、年齢段階別・性別の埋葬人骨の数がほぼ等しく、その意味ではバランスがとれている。他の埋葬群についても、本来は同様の構成を有していたと思われる。

これらの墓のうち注目しておきたいのは、701号墓と702号墓、そして1405号墓と1406号墓がほぼ土壙を切りあうかのように接しており、また808号墓と809号墓が近接するなど、あたかも2基一対となっているかのような状況が存在することである〔山田編1998:33〕。これに加えて、1302・1303・1304号墓、および1404・1407号墓は子供の埋葬例であるが、これらが地点的に集中する様子を見て取ることもできる。

道路や一般家屋の関係で発掘区を十分に広く設定できなかったために、北東-南西方向の墓群の広がりになお不確定な部分が存在するが、全体が列状配置構造をとること、その列内に埋葬群が存在すること、さらに2基一対となる墓の組合せが存在すること、および子供の埋葬例が一定地点に集中するといった墓地構造のあり方は、まさに堀部第1遺跡における各区の埋葬群のあり方と類似する。時期的にみた場合、土井ヶ浜遺跡から出土した前期の土器は綾羅木Ⅱ式からⅢ式を主体とし、これを山陰出雲編年と対比させればⅠ-2~3期を中心とすると思われるが、土井ヶ浜遺跡西区の1303号墓に副葬された土器や1601号墓に副葬された土器などは確実にⅠ-2期にまでは遡る。したがって、堀部第1遺跡と土井ヶ浜遺跡は、時期的にややズレがあるものの、ほぼ同時期に存在した墓地ということになる。

③……………鳥根県松江市古浦遺跡における墓地構造

(1) 墓地の全体構造

上記二遺跡は典型的な列状配置構造の墓地の事例であったが、堀部第1遺跡から直線距離にしてわずか4.4kmしか離れておらず、より海岸部に所在する古浦遺跡では全く異なる様相をみせている。

古浦遺跡は、鳥根県松江市鹿島町古浦に所在する古砂丘上に営まれた遺跡であり、弥生時代前期の墓地を中心とする。1948年に山本清によって人骨が調査され、学界の知るところとなった。その後1954年には再び山本清によって人骨が調査され、1956年には当時鳥取大学医学部に赴任していた小片保によって本格的な発掘調査が行われた。この調査では、古墳時代の人骨が出土したらしい。

1961年から1964年には、金関丈夫が都合4回にわたる発掘調査を行い、合計で70体を超える人骨が出土した〔藤田・赤澤編2005〕。しかしながら、遺体が埋葬されていた土壙のプランなどは確認されておらず、埋葬施設そのものについての検討を行うことはできない。

今回、墓地構造の分析に用いる資料は、1961年から64年に金関丈夫らによって調査されたものである(表4)。出土した人骨の頭位方向は南東を向くものから北東、南西を向くものなどがあり、土井ヶ浜遺跡のように特定の方向に偏るということはない。しかしながら砂丘の地形図と対照してみると、多くの人骨は傾斜に対して標高の高い方へ頭を向けていたり、あるいは等高線に平行する形で頭位方向を定めていたりしていることがわかる(図8)。このことから、古浦遺跡における頭位方向は、基本的に地形によって決定されていたと考えることができるだろう。また、頭位方向は年齢や性別によって決められていたということもないようである。その意味では頭位方向に斉一性をうかがうことはできない。

表4 古浦遺跡出土人骨一覧

人骨番号	上部構造	年齢段階	性別	装身具・副葬品	抜歯の有無	抜歯系列	備考
2号	配石	小児期	不明	ハイガイ製腕飾右6・左8	不明	不明	埋葬地点が離れる
3号	なし	乳児期	不明	なし	不明	不明	埋葬地点が離れる
21号	なし	幼児期	不明	碧玉製管玉2(耳飾?)	不明	不明	4-5歳 前頭部右に青斑
22号	なし	熟年期	女性	なし	上顎左犬歯, 下顎左右第1・2切歯・犬歯	C	4I2C型抜歯
23号	なし	乳児期	不明	ハイガイ製腕飾左4	不明	不明	1歳
24号	なし	幼児期	不明	ハイガイ製腕飾左6	不明	不明	2歳
25号	配石?	乳児期	不明	なし	不明	不明	人骨集積
26号	配石	壮年期	女性	なし	上顎左右犬歯・下顎左右犬歯	不明	2C型抜歯
28号	配石	乳児期	不明	ハイガイ製腕飾右5・貝小玉2396	不明	不明	1歳
29号	配石	幼児期	不明	オオツタノハ製腕飾右3・ハイガイ製腕飾左2・貝小玉72	不明	不明	2-3歳
30号	なし	小児期	不明	貝小玉? 2	不明	不明	8-9歳 骨病変あり
31号	なし	幼児期	不明	貝小玉198(左足飾の可能性あり)	不明	不明	2-3歳
32号	なし	幼児期	不明	ハイガイ製腕飾左5・貝小玉29	不明	不明	4-5歳 30号と同様の骨病変
33号	なし	幼児期	不明	なし	不明	不明	3歳
34号	なし	乳児期	不明	貝小玉36	不明	不明	2歳
35号	配石	熟年期	女性	碧玉製管玉2(耳飾?)	上顎左右犬歯	C	
36号	なし	壮年期	女性	なし	上顎左右犬歯	C	
37号	配石	幼児期	不明	巻貝供献?	不明	不明	4歳
38号	なし	乳児期	不明	なし	不明	不明	1歳未満
41号	なし	小児期	不明	なし	不明	不明	12歳くらい
42号	配石	壮年期	女性	小壺供献1	上顎左右犬歯・左第2切歯	C(IC)	弥生中期?
43号	なし	乳児期	不明	なし	不明	不明	生後五ヶ月
44号	なし	熟年期	男性	碧玉製管玉1?	不明	不明	
45号	なし	壮年期	女性	なし	不明	不明	前期以降か?
46号	なし	乳児期	不明	なし	不明	不明	44号と合葬か?
47号	なし	熟年期	男性?	なし	上顎右犬歯(左破損)	C	
49号	配石	熟年期	男性	ヒスイ製勾玉1・碧玉製管玉7(首飾)	上顎左右犬歯	C	
60号	なし	老年期	女性	なし	不明	不明	前頭部に青斑
61号	配石	壮年期	女性	ハマグリ1	上顎左右犬歯・下顎左右犬歯	C	2C型抜歯
64号	なし	成人	不明	なし	不明	不明	
65号	なし	小児期	不明	碧玉製管玉・サヌカイト製石鏃	不明	不明	70号と合葬か? 10歳くらい
66号	配石	熟年期	男性	打製石斧2・土器3	上顎右犬歯	C	中期中葉
67号	なし	熟年期	男性	なし	不明	不明	68号と一部重複
68号	配石	熟年期	男性	なし	上顎左右犬歯	C	67号と重複
69号	なし	壮年期	不明	なし	不明	不明	散乱骨
70号	なし	熟年期	男性?	なし	不明	不明	65号と合葬か?
71号	なし	熟年期	女性	なし	上顎左右犬歯	C	
72号	なし	熟年期	男性	なし	上顎左右犬歯	C	

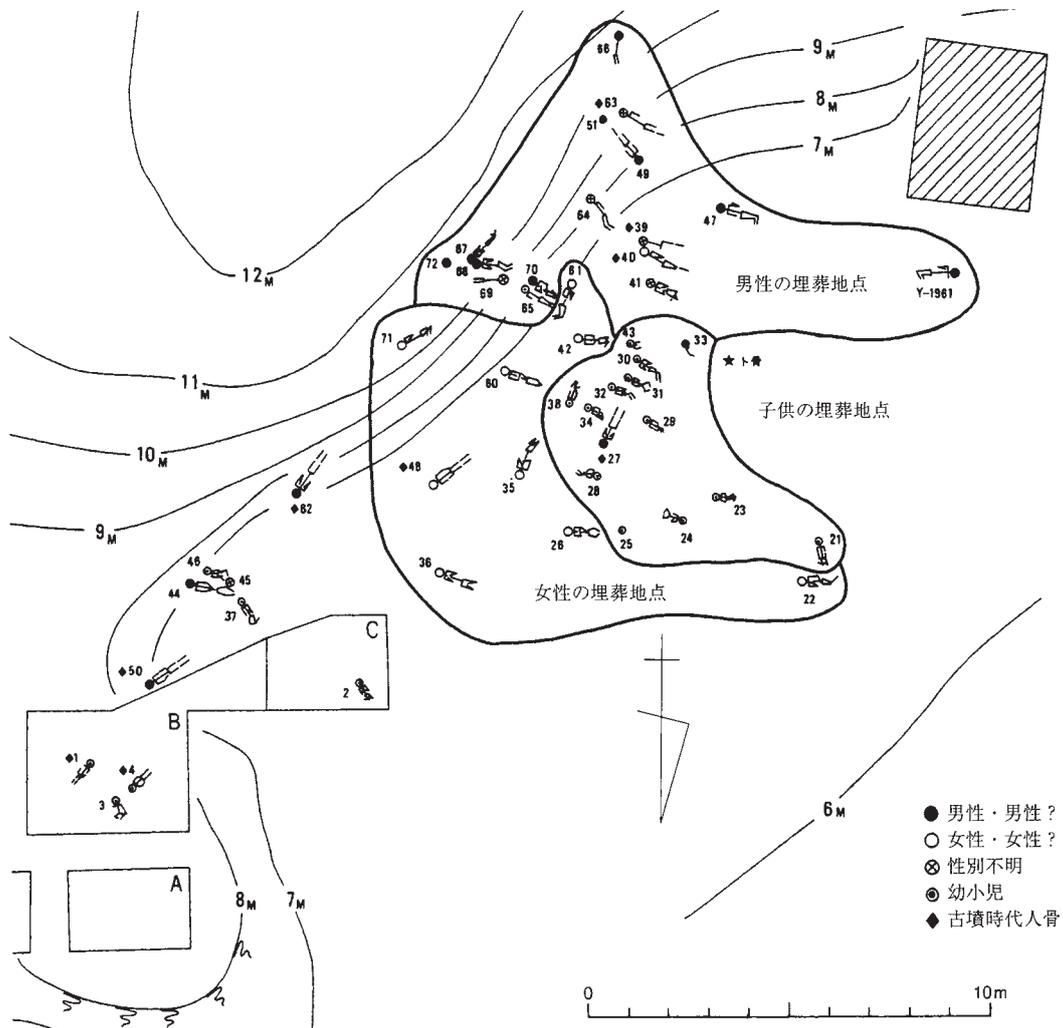


図8 古浦遺跡における人骨出土位置〔藤田ほか 2005〕を改変

埋葬姿勢も多くは膝をゆるく曲げた屈葬あるいは伸展葬であるが、これら埋葬姿勢によって、埋葬地点が異なるといった傾向性を見いだすことはできない。また、墓地構造にしても一見して堀部第1遺跡のように列状配置構造を呈するというものもなく、人骨の集中地点の存在を認める限りにおいて、塊状配置構造をとるものと判断される。

図8は、古浦遺跡における弥生時代前期の人骨の性別・年齢段階別の埋葬地点である。古浦遺跡からは基本的にI-2期に属する土器が出土しており、人骨の大部分もこの時期の所産であると考えられ、堀部第1遺跡や土井ヶ浜遺跡西区とほぼ同時期の墓地と捉えることが可能である。図8をみると、人骨の集中地点は大きく二地点に分かれるようである。一つ目の地点は2・3・44・45・46号人骨が出土した北東の地点であり、もう一つがその南西側にある20番台以降の人骨を中心とする地点である。仮に前者を北東区、後者を南西区ということにしよう。北東区は人骨の出土数が少ないこと、未掘地点が存在することなどから、ここでは南西区について分析を進めることにしたい。

(2) 南西区の墓群構造

南西区をみてまず気がつくことは、乳児期段階から小児期段階までの子供の埋葬例が南西区の中央付近に多く、地点的に集中していることである。また、女性の埋葬例は南西区の北から東側に、男性の埋葬例は南から西側に偏在する傾向がある。これらの点からみて、南西区では性別・年齢による埋葬地点の区分が存在したことがわかる [山田 2008a: 123]。一つの墓群の中に、年齢・性別による埋葬地点の区分があるということから見て、南西区は一つの埋葬群であり、大人の男性と女性、そして子供の埋葬地点は各々埋葬小群に相当するものと捉えるべきであろう⁽³⁾。このような墓群構造の中には、堀部第 1 遺跡や土井ヶ浜遺跡西地区で見られたような 2 基一対となるような分節構造を見いだすことはできない。

被葬者が年齢段階によって区分される傾向は、装身具の着装状況にもみることができる。古浦遺跡では、かねてより子供の埋葬例に装身具が伴うことが多いと指摘されており [金関 1975: 32]、すでに木下尚子によって詳細な検討が行われている [木下 2005]。その点は表 4 から追認が可能であろう。着装された装身具の多くは貝製の腕飾であり、子供が貝製腕飾を着装するという点では土井ヶ浜遺跡と類似している。しかしながら、子供の年齢段階別に装身具の着装状況をみると、1 歳未満とされる 38 号人骨と 43 号人骨には装身具は伴わない。また、12 歳頃とされる 41 号にも装身具は伴わない。したがって、子供の中にも 1 歳未満 / 2 歳から 10 歳頃まで / 12 歳以上の少なくとも三段階にわたる何らかの区分があった可能性があるといえるだろう。

以上を総合すると、古浦遺跡では、男性 / 女性、大人 / 子供という区分が重層的に存在し、その一方で子供の内部にも区分があったと想定される。性別・年齢によって区分されるこのような状況を、かつて筆者は年齢階梯制の問題と絡めて議論したことがあるが [山田 2008a: 125]、この点については変更の必要はないと考えている。

ここで注意しておきたいのは、古浦遺跡の人骨に確認できる抜歯の状況である。表 4 をみても分かるように、古浦遺跡の抜歯は基本的に上顎左右犬歯を除去するもので、筆者の分類の C 系列となるものである [山田 1997: 42]。もともと、この C 系列は、土井ヶ浜遺跡出土人骨にも確認できるものであり、山内清男や春成秀爾らによって縄文時代の文化的系統を引くものと想定されてきた [山内 1964: 145, 春成 1974: 47-49]。これに加え、古浦遺跡 22 号人骨には 4I2C 型 (下顎左右第 1・2 切歯, 犬歯除去)、26 号および 61 号人骨には 2C 型 (下顎左右犬歯除去) という、2C 系列の抜歯の存在が確認されている。これらの抜歯は明らかに縄文時代からの伝統を引いているものと想定できるだろう。このようにみると、古浦人は形質的には渡来系弥生人の形質を引くが、その墓地構造および抜歯風習には在来の縄文的要素が残存しているものとみてもよいであろう。ちなみに渡来系弥生人骨でありながら 4I2C 型抜歯を施されている事例には、弥生時代前期中頃の福岡県福岡市雀居遺跡 7 次調査 2 号人骨がある [中橋 2000]。この人骨は、土坑墓と甕棺墓からなる埋葬群よりやや離れた位置にある土坑墓より出土した成人女性である。また、同様の抜歯型式は甕棺墓 7 号 (K-7 号) 出土熟年期女性人骨にも確認されており、この甕棺墓も先の埋葬群からは地点的にやや離れている。地点的にやや離れた場所に埋葬された女性人骨に縄文的な抜歯が施されていたということは興味深く、抜歯風習のあり方とリンクする何らかの区分があった可能性がある。この事例から推察して、

弥生時代の前期段階においては、人骨の形質と文化的要素の不一致が、北部九州から山陰地方にかけてといった意外に広い地域で散見された可能性があるといえよう。

④……………沖丈遺跡における墓群構造

(1) 墓地の全体構造

沖丈遺跡は島根県邑智郡美郷町に所在し、江の川右岸の段丘上に位置する。1995年から96年にかけて邑智町教育委員会によって発掘調査が行なわれ、弥生時代前期の配石墓群が検出された〔牧田編2001〕。配石墓は2群検出されており、それぞれA群、B群と呼称されている。

A群は、1号から12号までの12基の配石墓から構成される。配石の下部には楕円形、もしくは円形の土壇が存在し、内から管玉が出土したものが4基ある(図9、表5)。一方のB群はA群の北側約20mの地点にあり、12基の配石墓で構成されている。しかしながら、調査の途中で遺跡の一部保存が決定したため、下部構造まで調査されたものは3基のみであり、残りの9基に関しては上部構造のみの調査で終わっている。したがって、ここではA群を検討対象とすることにしよう。なお、これらA群とB群はその規模からみて、各々埋葬群に対応するものと考えられる。また、各配石墓からは明確に時期を比定できるような土器の副葬品は出土していないが、周辺から出土した土器は若干古相を持ちつつも、おおよそ松本編年の石見I-2期に相当するものと思われ、配石墓もこの時期の所産と考えられる。

(2) A群の墓群構造

図9はA群における1号から12号配石墓の位置関係である。一見して、塊状配置構造であることが見て取れるが、このうち1～10号墓は三角形にまとまり、11・12号墓がこれらからやや離れて位置している。墓群の周囲には遺構の空白地帯があり、配石墓群一つが完掘されたものと考えられる。

これらのうち、3号墓は後世の井戸の掘削により破壊を受けており、詳細は不明である。また8・10・11号墓については遺構保存の対象となり、下部構造は調査されていない。

調査された配石墓は1・2・4・5・6・7・9・12号墓であり、これらのうち1・2・5・6号墓の土壇底面から管玉が出土している。管玉が装身具として着装されていたと想定した場合、その出土位置から埋葬遺体の頭位方向を推定すると、これら4基とも西南頭位となることが分かった。下部構造が調査されていないため、他の配石墓の土壇長軸方向が分からないものもあるが、11・12号墓などは北東-南西に軸をもつため、これらの配石墓も頭位方向は南西になる可能性が高い。一方、4・7・10号配石墓は北西-東南に軸方向があり、A群においては頭位方向が二つの方向に偏るようである。しかしながら、その偏りは北部九州などの弥生前期墓地にみられるような斉一的なものではない。弥生時代の墓地の特長として、頭位方向の斉一性を挙げることができるのならば、沖丈遺跡の墓群は、これとは異なったあり方をしているといえるだろう。

報告者の牧田公平によれば、1・2・4・5号墓は、その掘り方が二段掘りになっていたりと、土壇

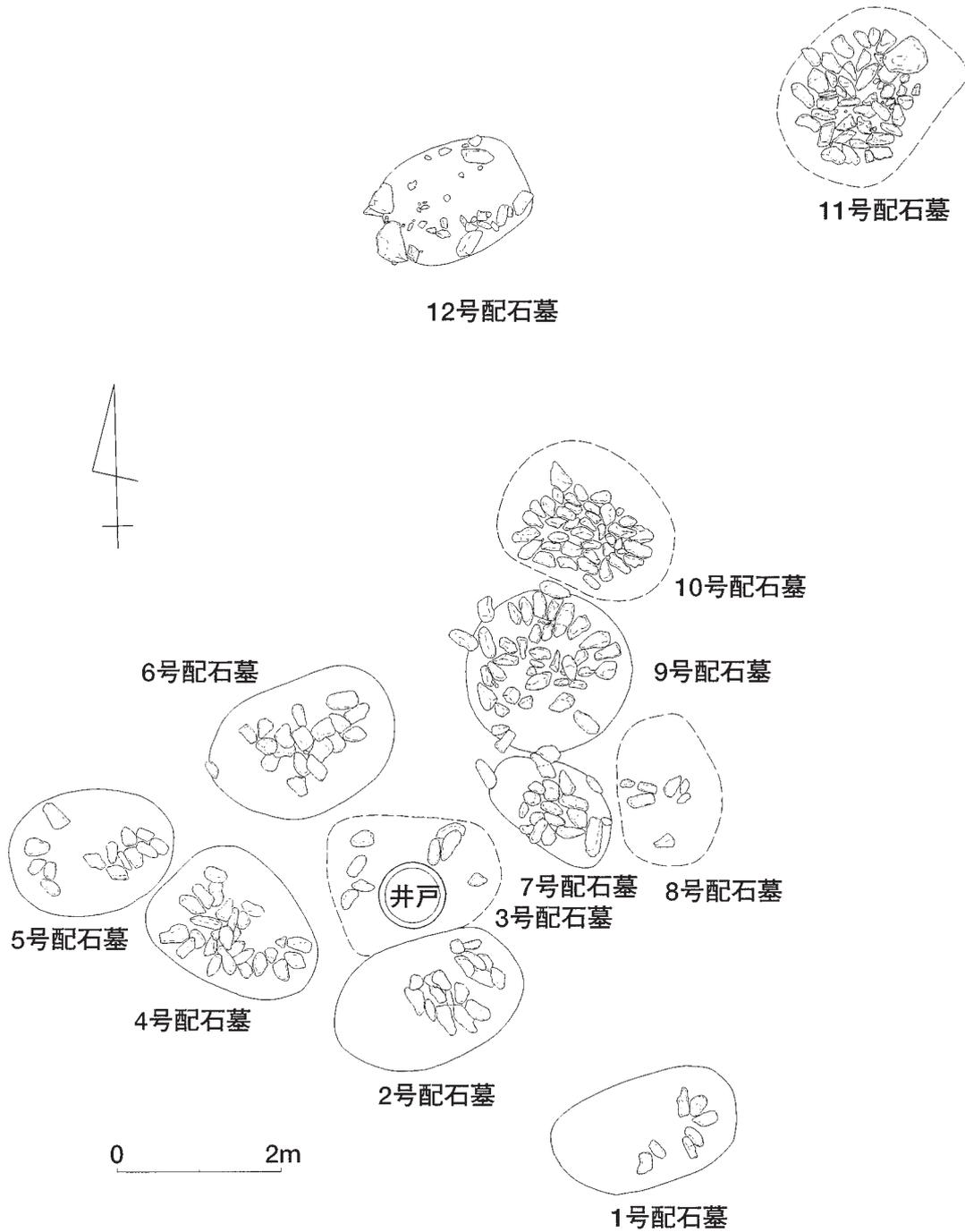


図9 沖丈遺跡配石墓A群検出状況 [牧田編 2001] より

表5 沖丈遺跡において検出された配石墓一覧

墓群	番号	土壇プラン	土壇規模(m)	副葬品等	備考
A	1号	隅丸方形	2.3 × 1.3	管玉 36点	
A	2号	楕円形	2.4 × 1.5	管玉 16点	
A	3号	不整台形			未調査
A	4号	不整楕円形	2.2 × 1.6	土器?	土壇は二段掘り
A	5号	楕円形	2.0 × 1.5	管玉 16点	土壇底面が長方形をなす
A	6号	不整楕円形	2.3 × 1.6	管玉 44点	
A	7号	不整楕円形	1.7 × 1.0		
A	8号	不整長方形			未調査
A	9号	円形	2.0 × 2.0	土器?	
A	10号	不整楕円形			未調査
A	11号	楕円形			未調査 配石内に石皿
A	12号	不整楕円形	1.7 × 1.4		配石内に磨製石斧・打製石斧・石皿・凹石・磨石
B	1号	楕円形	1.2 × 0.9		
B	2号	楕円形	1.5 × 0.9		
B	3号	不整楕円形	1.5 × 0.9		
B	4号				未調査
B	5号				未調査
B	6号				未調査
B	7号				未調査
B	8号				未調査
B	9号				未調査
B	10号				未調査
B	11号				未調査
B	12号				未調査

の底面が平坦であったりしたことから、下部構造として木棺が存在した可能性があるという〔牧田編 2005: 293〕(図10)。また、これらの配石墓の土壇底面規模は、長さ1.7～1.8m、幅0.5～0.9mであり、木棺内に伸展葬で埋葬された可能性があり、その一方で、それ以外の配石墓の埋葬施設は底面の形状からみて単純土坑であったと想定され、長さが最大でも1.4mほどであることからみて、屈葬で埋葬されたものと考えられるという。そうであるならば、沖丈遺跡の配石墓A群には、下部構造における埋葬施設として木棺と単純土坑の両者が存在しており、そして木棺をもつ墓から、管玉が出土しているということになる。この評価については、後章において述べることにしよう。

一方で、A群の11号および12号配石墓の上部配石内には石皿や磨石・砥石といった石器が含まれている。このような状況は往々にして縄文時代の配石墓にみられるものであり、そのあり方は極めて在来的といえることができるだろう。

興味深いのは、下部構造として木棺を有し(1・2・4・5号墓)、管玉が出土した配石墓(1・2・5・

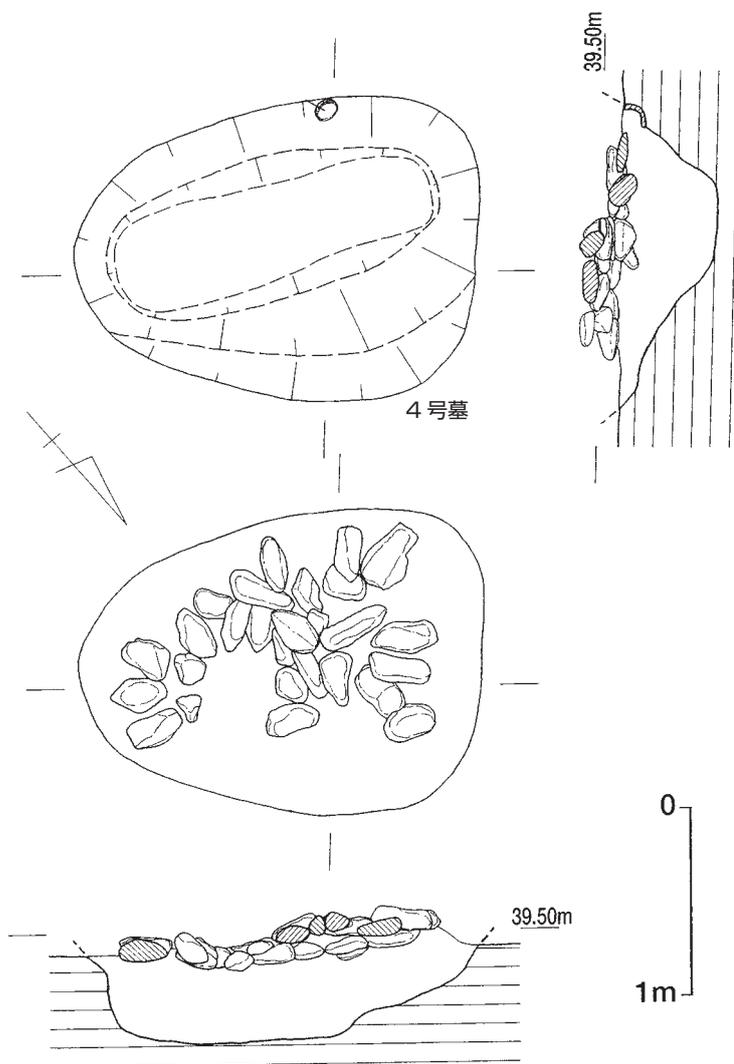


図 10 木棺の使用が想定される配石墓 [牧田編 2001] より

6号墓)がA群の西南部に多く、縄文的な上部配石をもつ事例が、A群には含まれるのであろうが、やや配石墓の集中地点から距離をおいていることである。このような在来の縄文的様相をみせる墓が、帰属する埋葬群の主体からやや離れた位置にあるという状況は先に触れた雀居遺跡においてもみられたものである。完掘されていない事例もあるため確定的なことはいえないが、この位置関係には注意しておきたい。

⑤……………墓制からみた山陰地方における「弥生化」の実態

(1)各遺跡にみる在来的要素と渡来的要素

以上、弥生時代前期の墓地、4遺跡を検討してみた。同じ海岸部に位置したとしても、堀部第1遺跡と古浦遺跡のように、墓地構造がまったく異なる遺跡が存在する。また、土井ヶ浜遺跡西区と堀部第1遺跡のように、墓地構造が類似する場合も存在する。列状配置構造は弥生時代になってから確認される構造なので、いわゆる渡来文化の一環として山陰地方に入ってきたものに相違ない。一方、塊状配置構造に関しては、類似した事例が縄文時代に確認できることから、おそらくは縄文時代以来の系譜を引いている在来的なものと考えることができよう [山田 2000]。ただし、塊状配

置構造が縄文時代からの系譜を引いているといっても、古浦遺跡のように埋葬された人々は渡来系弥生人であるという場合もある。人骨の形質と、墓地構造およびその墓地を作り出した文化的系譜は、必ずしも一致するものではないということであろう。その一方で、古浦遺跡においてみられた性別・年齢区分が、縄文時代にまで遡るものなのかという点については注意が必要である。残念ながら山陰地方には多数の埋葬人骨を出土するような貝塚遺跡は存在せず、

詳細な検討は不可能であるが、山陽地方の諸遺跡、たとえば岡山県笠岡市津雲貝塚などでは男女別・あるいは年齢別による埋葬地点の区分は、一部年齢においてその可能性があるものの、明確ではない〔設楽 1993:131, 山田 2008b:165〕。しかしながら、このような男性/女性・大人/子供といった重層的区分は、東日本における縄文時代墓地ではしばしば散見されるものであり、その意味では在来の縄文的様相とすることができるとも考えられる。加えて、先に述べたように古浦遺跡における抜歯のあり方が縄文時代の伝統を引いている可能性が高いという点を考え合わせるならば、やはり先の想定には一定の蓋然性があると思われる。

山間部における沖丈遺跡の場合は、状況がさらに複雑である。A群内の配石墓の中には、埋葬施設として木棺が使用された可能性のあるものが含まれている。縄文時代における木棺の使用例については、たとえば山口県下関市御堂遺跡における晩期（黒川式期）の事例が報告されているが〔水嶋 1991 編〕、これは全国的にみても稀有な事例である。御堂遺跡の事例は、木棺に対応する土坑の形状が必ずしも隅丸長方形ではなくともよいことを明らかにしており（図11）、その意味ではこの系譜上に沖丈遺跡の事例が載る可能性もある。しかしながら、弥生時代における類例の多さを考えてみれば、やはり木棺は弥生時代になって山陰地方に導入された渡来的要素と考えることができ、時期的にみて類似する資料を捜すならば、上部に配石があり、下部構造が木棺であるという構造は、まさに本稿で分析した堀部第1遺跡の配石墓群を挙げることができるだろう。また、沖丈遺跡A群の1・2・5・6号墓からは凝灰岩製の管玉が出土しているが、いずれもエッジがシャープな筒形状をしており、これも縄文時代の玉類に直接的な系譜を求めることはできない（図12）。沖丈遺跡の墓地構造については筆者も以前触れたことがあるが〔山田 2000:20〕、その時点では土壌の形状などに関する詳細な情報が開示されていなかった〔牧田 1999〕。このため墓の群在化状況から、沖丈遺跡の資料を塊状配置構造として捉え、これを縄文時代以来の系譜を引くものと考えてきたが、埋

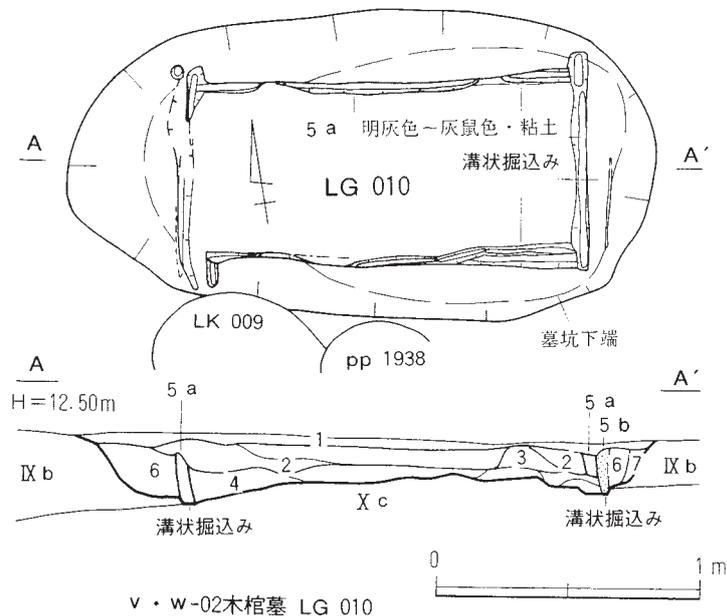


図11 御堂遺跡における木棺墓〔水嶋 1991〕より

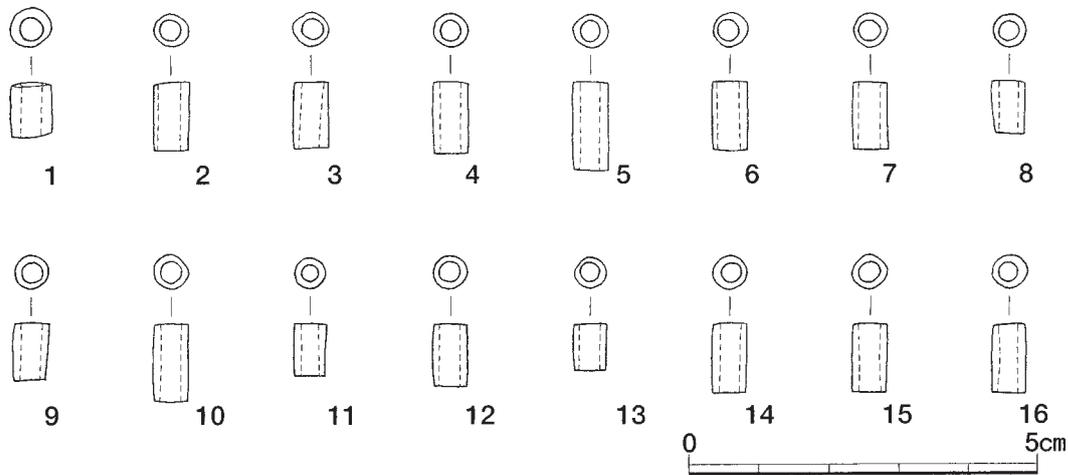


図 12 沖丈遺跡配石墓A群2号墓出土管玉 [牧田編 2001]より

葬施設・副葬品に縄文時代のものとは一線を画すものがあるということからみて、この見解については若干修正が必要であろう。ただし、沖丈遺跡においても木棺を埋葬施設とし、管玉が出土するような事例以外にも、埋葬施設が単純土坑である事例や上部配石に石皿や磨石を使用する事例も存在し、いわば渡来的な要素と在来的な要素が混在した状況を見出すことができる。弥生時代前期においては、塊状配置構造を採っている墓地といえども、やはり在来的な要素を全てそのまま維持しているのではなく、渡来的な要素と接触し変容していく、いわゆる「弥生化」がすでに起こっていたと理解すべきである。そしてその場合、可視属性である墓の配置が、縄文時代からの系譜を引く塊状配置構造を採っていることは興味深い。

ここで、墓そのものに付帯された社会的な意味合いを考えてみよう。筆者はかつて、墓から得ることのできる情報を埋葬属性と呼び、その内容を可視属性と不可視属性とに分類したことがある [山田 1997:47]。可視属性とは埋葬後に残された、生きている人々が目にするることのできるものであり、埋葬位置・頭位方向（上部構造がある場合）・立石・土盛・墓標などの上部構造物、地上に置かれた副葬品などを指す。不可視属性とは埋葬後に生きている人々が目にするることのできないものであり、下部構造・埋葬施設・埋葬姿勢や内部への副葬品などがこれにあたる。一般的傾向として、社会的な要素については、可視属性の方がより強く表現される可能性が高いと想定される。このように考えた場合、列状配置構造を採る墓地、例えば堀部第1遺跡は、可視属性としては渡来的、また埋葬施設として木棺をもつため不可視属性としても渡来的な様相をもつといえるだろう。一方で沖丈遺跡の場合、埋葬位置という可視属性は在来的な要素であり、埋葬施設および副葬品には渡来的な要素があるということになるだろう。山間地の人々が、縄文的世界と弥生的世界の間で揺れ動く様が見て取れる。

(2) 墓地構造・埋葬群・埋葬小群における対比

堀部第1遺跡は、直接的に海に面してはいないものの、海岸線からの距離は約1.8kmほどであり、

一山越える必要があるが、海側に近い遺跡として考えてよいだろう。渡来系弥生人骨を多数出土した土井ヶ浜遺跡も海岸部の遺跡であり、この2遺跡の墓地構造が類似するという点からみて、堀部第1遺跡も渡来系弥生人の残した墓地遺跡であるとみて、まず間違いない。

ここで、各遺跡において確認された埋葬群について考察を加えておきたい。堀部第1遺跡においては、各埋葬群の中に配石墓2基一対のセットがあり、これに他の埋葬例があるというあり方をしていた。土井ヶ浜遺跡西区においても同じようなあり方が観察できる。

さて、問題はこの2基一対となる墓の内容である。先も述べたように土井ヶ浜遺跡西地区では2基一対となるものは701号墓と702号墓、808号墓と809号墓、1405号墓と1406号墓である。

701・702号墓および1405・1406号墓の組合せには、それぞれ大人の男性が埋葬されていた。しかし、それぞれの組合せにおける個々の埋葬例をよく吟味してみると、例えば701号墓から出土した人骨の頭蓋形態は低顔・低眼窩であり、いわゆる縄文系弥生人ないしは在来系弥生人とされているもので、土井ヶ浜遺跡においては東区も含めてこれ1例のみの出土である。また1406号墓から出土した人骨の埋葬姿勢は俯臥屈葬という極めて特異な事例であり、これも土井ヶ浜遺跡においては唯一のものである。このようにみると、701・702号墓および1405・1406号墓にみることのできる2基一対の組合せは、片方が非常に特殊な事例であった可能性がある。その点を考慮したとしても、2基一対の組み合わせが、ともに男性であるということを重くみれば、これらのペアは少なくとも並列するから夫婦であるなどと単純に解釈されるべきものではないということになる。その一方で、2基一対の組となる可能性の高い808・809号墓に埋葬されていたのは、ともに上顎左右側切歯を抜歯した熟年の男女であることは興味深い。以前、筆者は土井ヶ浜遺跡東地区には抜歯系列からなる埋葬群が存在し、それらの内容を「世帯」や「家族」に比定したことがある〔山田1997：57〕。その際、婚姻は異なる抜歯系列間において行われたと考えたが、これを是とするならば同じ抜歯系列である808号と809号は夫婦ではないことになる。つまり、これらの埋葬群は、最も想定しやすい一組の夫婦を中心とする核家族に比定されるものではないということになる。これらの点を踏まえた上で、筆者は土井ヶ浜遺跡西区B群の年齢・性別構成及びその規模からみて、いささか突飛な発言であることを認めつつも、また筆者の先行研究でもすでに述べたことがあるように〔山田前出〕、B群を拡大家族までを含めた小家族集団に比定したいと考えている〔山田2008b：86〕。ここから堀部第1遺跡における埋葬群を解釈してみよう。

堀部第1遺跡西区の埋葬群の中には、4・16・17号墓、19・20・22・23・57号墓、3・56・15・24・25・30号墓、1・2・21号墓、26・27・28号墓（ただし不完全）という、少なくとも五つの埋葬小群が存在することになる。ここに埋葬された五つの小家族集団の人々は、埋葬群を構成したさらに大きな人間集団に帰属していたとみて、まず間違いはない。それは、細かい区分を残しつつも、子供の埋葬例を同一地点に集中させるという墓制のあり方からも推察できる。その場合、この埋葬群は拡大家族などを含む、より規模の大きな家族集団の埋葬地点として捕らえることが可能であろう。この解釈を堀部第1遺跡内にある他の埋葬群にまで敷衍するならば、堀部第1遺跡の墓地は複数の家族集団からなる共同墓地という形で理解ができるかと思われる。もちろんこれら複数の家族集団が血縁的にもまったく無関係であるはずはなく、その意味では堀部第1遺跡の墓地の被葬者は、リネージやクランといった同一出自集団出身者に比定することも可能であろう。

各埋葬小群が小家族集団に比定することができ、埋葬群がその集合体、そして一つの墓地が出自集団の共同墓地であったとするならば、その構造は縄文時代の墓地構造とさして変わるものではない〔山田2010:298-300〕。山陰地方においては、列状配置構造をもつ堀部第1遺跡ですら、その埋葬群の内容に関しては縄文時代以来の伝統から大きくは離れていないとみることもできるだろう。このことは、堀部第1遺跡においては、渡来系弥生人を主体とした集団の中に在地の縄文時代からの伝統をひく人々が存在していたことを示唆するものである。

藤尾慎一郎は、出雲平野における水稻農耕集落にはI期前葉(板付I新式)に在地の集団が農耕民化した第一世代の継続型と、I期後半(板付IIb式)に農耕民化した第二世代の新規開拓型の二種類が存在し、島根県松江市鹿島町北講武氏元遺跡をこの新規開拓型に位置付けた〔藤尾2000:116-118〕。また、その集団構成について「この遺跡から出土した口縁下端凸状甕と呼ばれる土器は、出雲在来の人が遠賀川系甕を作るために工夫したあとがよく残っているため、在来の人々が含まれていたことは確実である」〔藤尾前出:116〕として、北講武氏元遺跡の集団像を狩猟採集民・農耕民として理解した。実はこの北講武氏元遺跡こそ、堀部第1遺跡に埋葬された人々の居住地と目されている遺跡であり〔赤澤2005編:2〕、先の堀部第1遺跡の埋葬群の内容から想定された集団像は、土器の検討から導かれた藤尾の見解と整合的であるということができよう。

(3) 山陰地方における「弥生化」プロセス再考

筆者は、かつて山陰地方における弥生化のプロセスを5段階にわけて説明したことがある。それは以下のようなものであった。

- 1段階: 土器や生業などの情報の流入。
- 2段階: 人の移住。灌漑水田稲作の導入。それにとまなう墓制・祭祀など新たな精神文化の流入。
従来の精神文化の変質、衰退。
- 3段階: 遺跡の増加にうかがえる活動の活発化および人口数の増加。
- 4段階: 環濠の出現にみられる集落構造の変化。
- 5段階: 定住性の強化。拠点集落の出現。排他的テリトリーの成立。集団的戦闘行為の発生へ。

これらの諸プロセスが、土器様式にしてわずか数様式の間で完遂されたとの想定から、筆者はこの地域における弥生化が比較的スムーズかつダイナミックなものであったと考えた。しかしながら、塊状配置構造をもつ墓地と列状配置構造をもつ墓地の対比にみることで、墓制からみれば、各遺跡には在来的なものと渡来的なものとの相克が残されており、その状況も一律単純なものではなかったということが予想される。山陰地方における墓制や祭祀などの新たな精神文化の流入は、必ずしも渡来系弥生人の移住がそのまま在地における縄文的な要素を一気に塗りつぶしていったというような威力・高圧的なものではなく、やはり在地集団との接触・変容があり、様々な関係を通じながらやがては全体が弥生的なものへと遷移していったということになるだろう。

沖丈遺跡にみられたような在来的要素と渡来的要素の混在、堀部第1遺跡にみられたような縄文的墓制の内的残存は、上述した弥生化プロセスのうち2段階に、時期的にはI-2期ころにみることでできる事⁽⁴⁾ものである。しかしながら、この時期を過ぎると塊状配置構造を呈する埋葬群のみが単独で構成される墓地はみられなくなり、頭位方向の斉一化が顕著となる〔山田2000〕。その遷移が、

やはり土器様式にして1～2様式の間という短い期間であったことは疑いない。

以上、4遺跡の墓地を取り上げて、山陰地方における縄文から弥生への移行期における墓制上の諸問題について考察を加えてきた。各遺跡における在地的様相と渡来的様相のあり方、および埋葬群の内容的検討の結果を考慮した場合、かつて筆者が想定した弥生化のプロセス〔山田2009:177〕は、上述してきたように2段階において若干の補記が必要となるだろう。

おわりに

山陰地方の弥生時代前期においては、一見渡来的な墓地構造をもった遺跡にも、在来的様相が内在されていた。また、在来的墓地構造の内にも渡来的な要素が採り入れられていた。この両者の差は、移住してきた渡来系弥生人の数的規模や入植時における地元民との関係性などに基づくものと想定できよう。今後は炭素・窒素同位体分析による食性の差異や細かな形質的差異、あるいはSr同位体比などによる移動の有無など、人類学的視点を踏まえた上でさらに詳細な議論を行うことが望まれる。

本稿を草するにあたり、多くの方々からご教示を頂いた。以下に記して謝意を表したい。

赤澤秀則・設楽博己・藤尾慎一郎・濱田竜彦・春成秀爾・李亨源・野島永・安藤広道・松木武彦・小林青樹・小林謙一・吉田広・高瀬克範・岸本直文・小椋純一・上野祥史・坂本稔・西本豊弘・広瀬和雄・李昌熙（以上、順不同）

註

(1)——本稿では山田2000を踏まえながら、埋葬属性のうち弥生時代の墓制にみることができる渡来的な要素（列状配置構造・木棺およびこれの存在を推定させる長方形の土壙・管玉・頭位方向の全体的斉一性）と在来縄文時代墓制のなかにみることができる在来的要素（塊状配置構造・楕円形の土壙）を区別し、これらを「渡来的」・「在来的」と呼び分けることにしたい。ただし、本文中では「」は外すことにする。

(2)——自身の体験から思うに、砂丘上における墓壙の認定は非常に難しく、実際には掘ってみないと確実に墓であるかどうかの認定は難しい。

(3)——この点、山田2008とは理解を異にするため、訂正しておきたい。

(4)——このような山陰地方における弥生化プロセスに対して、濱田竜彦は当該地方における初期遠賀川式土器のあり方から様相1～5を設定し、自身の設定した様相4・5を筆者の2段階に比定している（濱田2012:139）。また、濱田は様相4・5の時期を出雲第I-2様式の中で捉えており、続く第I-3様式相当の土器群はほぼ遠賀川式土器単純の様相を示しているとして、在地集団の世代交代とも相まって新たな生活様式への転換が加速したものと見解を出している。筆者自身も3段階を第I-3期頃と想定しており、その意味では土器の状況からみた濱田の様相と筆者の段階の間には大きな齟齬は無いようである。

引用・参考文献

- 赤澤秀則編 2005『堀部第1遺跡』鹿島町教育委員会。
木下尚子 2005「弥生時代の子供用貝輪論—古浦遺跡の貝輪によせて」藤田 等・赤澤秀則編2005『古浦遺跡』古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会, 300-322頁。
設楽博己 1993「縄文人の通過儀礼はどのようなものだったか」『新視点日本の歴史』第1巻 原始編, 124-131頁, 新人物往来社。

-
- 中橋孝博 2000「福岡市雀居遺跡(第7・9次調査)出土の弥生前期人骨」松村道博編『雀居遺跡5』183-188頁, 福岡市教育委員会。
- 濱田竜彦 2012「出雲原山式再考-山陰地方の初期遠賀川式土器-」『菟原II-森岡秀人さん還暦記念論文集-』, 127-140頁。
- 春成秀爾 1974「抜歯の意義(2)」『考古学研究』第20巻第3号, 41-58頁。
- 藤尾慎一郎 2000「出雲平野における弥生文化の成立過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集, 97-127頁。
- 藤田 等・赤澤 秀則編 2005『古浦遺跡』古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会。
- 牧田公平 1999「邑智町沖丈遺跡の配石墓」『悠邑』I, 33-34頁。
- 牧田公平編 2001『沖丈遺跡』邑智町教育委員会。
- 松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編, 413-482頁。
- 水嶋稔夫編 1991『御堂遺跡』下関市教育委員会。
- 山内清男 1964「日本先史時代概説」『日本の原始美術』第1巻 縄文土器, 135-147頁, 講談社。
- 山田康弘 1995「多数合葬例の意義」『考古学研究』第42巻第2号, 52-67頁。
- 山田康弘 1997「土井ヶ浜集団の社会組織」『先史学・考古学論究』II, 熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集, 41-70頁。
- 山田康弘 1999「縄文人骨の埋葬属性と土壙長」『筑波大学先史学・考古学研究』第10号, 1-22頁。
- 山田康弘 2000「山陰地方における列状配置墓域の展開」『鳥根考古学会誌』第17集, 15-38頁。
- 山田康弘 2008a「墓と人骨」『弥生時代の考古学』第8巻 集落からよむ弥生社会, 112-130頁, 同成社。
- 山田康弘 2008b『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社。
- 山田康弘 2009「縄文文化と弥生文化」『弥生時代の考古学』第1巻 弥生文化の輪郭, 165-183頁, 同成社。
- 山田康弘 2010「中国地方における縄文時代の親族組織」『先史学・考古学論究』V 甲元眞之先生退任記念, 287-306頁。
- 山田康弘編 1997『土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査報告書』土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2012年12月7日受付, 2013年3月26日審査終了)

Cemeterial Structures of the Early Yayoi Period in Sanin Region: Jomon and Yayoi Cultures from the Viewpoint of Burial Systems

YAMADA Yasuhiro

The shift from Jomon period to Yayoi period in the Sanin region has been considered relatively smooth but highly dynamic [Yamada 2009: 178-179]. However, detailed examinations on the structure of cemeteries at early Yayoi sites reveals that despite their foreign appearance, the burial system in that period actually involved local (Jomon-ish) elements in a complex way. At Horibe I site, for example, the foundations of the graves were built in a straight line, which can be regarded as a foreign structure since the Jomon burial system did not adopt this arrangement. The site, however, includes local elements: Inside of the graves, there remain several groups of burial mounds at each of which a small family unit was exclusively buried. The graves at Koura site, Shimane Prefecture, also contain local elements though the site is located on the coast where bones of immigrant Yayoi people have been unearthed. Following the Jomon burial system, the site has a classification by age and sex and building foundations arranged in clusters. Though Horibe I site and Koura site are contemporary ruins located close to each other, there is a large difference in the cemeterial structure. Their comparison shows the complexity of situation at that time. Moreover, the graves at Okijo site among the mountain appear to be an extension of the Jomon burial system, with building foundations laid in clusters, but it was revealed to have foreign elements at its understructure. From this invisible part, wooden coffins and cylindrical beads have been excavated. Based on the above mentioned points, this article suggests a revised perspective on the shift process to Yayoi culture in the Sanin region: Despite the smooth and dynamic shift in the long term, the burial system of each site contains both local and foreign elements, which illustrates how the local Jomon people interacted with immigrants and their foreign culture.

Key words: Early Yayoi period, Immigrant Yayoi people, Burial system, Line arrangement structure, Cluster arrangement structure
